

図書館たより

号数 第79号
発行日 昭和62年12月19日
編集 島根県立図書館
発行 松江市内中原町52
TEL (0852) 22-5725
印刷 島根印刷株式会社



ドナルド・ホール作「にくるまひいて」より

「読書離れ」を考える

島根県学校図書館協議会 会長 豊田富士紀

最近の某図書館の調査によると、「本が大好きでよく読書をする」と自分で思っている子どもが、小学校低学年では、男子60%、女子77%だが、小学校6年生では、男子30%、女子63%となり、中学校3年生では、男子22%、女子45%というふうに、成長するに従って「読書好きの子ども」が減ってきている。これは、当人がそう思っているというだけで客観性はないかもしれないが、この結果から高校生や大学生のことを考えてみても、びっくりするような高い率の読書好きは浮かんでこない。

今、私ども学校図書館の立場では「読書」というものを広い意味でとらえ、「学習のための読書」(しらべ読み)と「教養のための読書」(楽しみ読み)の二つの方向からその指導に取り組んでいる。前者は、「自ら学ぶ力」の育成をねらい、学習(学校での学習だけでなく広い意味での学習)に必要な知識・情報を得たり、調査や研究をしたり、生活を合理化したりするための読書である。後者は、「豊かな人格の形成」をねらい、よりよい生き方を求め、明るく楽しい生活をするための読書である。漢和辞典をひいてみると、読書の意味を「書物を読む、学問をする」「書を読み、字を習う」と説明していることと符合している。さらに、読書という場合の「書」とは何をさすのか。「書=本」というふうに考え、きちんと印刷されて一冊の本として製本されたものだけを読書の対象とすることが適当かどうか、も疑問であろう。

さて、巷で話題となっている「読書離れ」は、どういう意味の読書離れなのか。昔に比べて「総体として読書離れしている」というのか、「ある部分が読書離れしている」というのか、あるいは、読書以外の、例えば「マスメディアに接する時間との対比で読書離れしている」というのか、その辺の共通理解がないと読書離れ対策は空転するのではないだろうか。社会全体の情報量の爆発的な増大に比例して、子どもの知識・情報の量も、それが生きていくうえでどれだけ役立つかということは別として、昔とは比べものにならないほど増えていることは間違いないと思う。そこには、映像文化の極めて大きな影響があることは否めないけれど、自ら求めてやる「学習のための読書」によるそれも、昔に勝りこそすれ決して少なくなっているとは思えないと考えるのは、当を得ていないといえるのだろうか。

私は、読書離れを総体として考えたくはない。問題は読書の「バランスの崩れ」だと思う。子どもも大人も心にゆとりがなく、促成栽培的な感覚が異常に発達して、結実の段階で役に立つ「基肥としての読書」から離れているように思えてならない。

知識や情報は多ければ多いほどいいというものではないのと同じように、読書もその量が多いことだけがいいのではない。「適時に、適書を」という読書の質が大切である。だからこそそこに、親や教師や先輩による根気づよい「読書の指導」が必要となってくるのである。

浜田市立図書館

浜田市 殿町 79-1
TEL 087572-0460

●浜田市立図書館は、明治34年創設以来今年で86年を数える。当時は私立図書館として発足しているが、私立とはいえ一個人ではなく初代館長中原貞七氏以下5名により発起し、地域の各界の有識者49名の設立委員により開設している。大正3年に発行された冊子の図書館の紹介欄には、巡回文庫も有ったと記載されており、活発な図書館活動をしていた事がうかがえ、その後町立、市立となり現在に至っている。現在の建物は昭和44年に鉄筋二階建てで建築されたもので、蔵書数も当時より相当増加し又、情報センターとして館も多様性を帯びて来ている為、館全体狭隘化してきているのが今後の課題である。

この度、堀口館長が浜田市立図書館沿革誌を上梓された。沿革史がなく館の歴史について殆んど不明であった為、大要が判明して来た。

●当館の蔵書数は9月末で約7万1千冊であり、貸出冊数は61年度で約3万2千冊である。

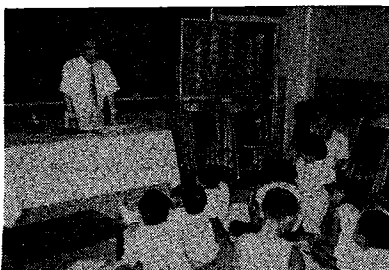
蔵書数は5万浜田市民1人当り1.4冊であり、当面市民1人当り2冊10万冊を目標にしており、又貸出についても少くとも市民1人当り1冊の5万冊を目標として努力しているところである。

●読書をする習慣を身につけさせたり、又図書館を少しでも多くの方に利用していただくため、各種の事業を行っているところであるが、図書館として長期間継続して行う基本的な事業に、その年度毎にユニークな短期事業とを取り入れながら進めている。

まず基本的な事業としては、児童読書感想文コンクール(昭和46年度開始)、古文書を読む会(昭和45年1月発足)、子供映画会(昭和57年開始)、子供読書教室及び婦人読書教室を行っている。

1、2紹介すると、子供読書教室は昭和46年度に開設し、現在3地区で行っており、テキストによる読書会を主体とし、折紙の会、俳句の会、クリスマス会、ある

「郷土の生んだ偉人伝を聞こう」会場風景



いは郷土の歴史を通して郷土愛を育てるため市内の史跡めぐりなどを取り入れている。「私も子供読書教室に入っていました」と若いお母さんが幼児の手を引きながら図書館に出入りされているのを時折見受けると、長期間つづけている効果が少くともここ

に表われているものとうれしく思う。

婦人読書教室は昭和47年度より開始し、現在16年に至っている。毎年市内各地から20数名を募集して開設しており、20才代から70才代迄の広い年齢層である。この読書教室で身につけた体験を生かして、各会員が各々自分の地区で小さくてもよいから読書の会を開いてくれたら、浜田の読書会の地図が輪と輪で重り合い埋りつくしてしまうだろう事を期待している。次にユニークな短期事業としては、本年は「郷土の生んだ偉人伝を聞こう」と題して夏休み期間中、毎週1回6人の偉人を選出し、児童を対象として開催した。この様な郷土に関するものを機会あるごとに催して行きたいと思っている。又今一つは、手づくり絵本の展示会を開催する事を計画している。

●館外奉仕活動としては、佐々田奉公会簡易閲覧所に配本している。これは財団法人佐々田奉公会から毎年80万円の寄付の中30万円を充てており、昭和44年から現在迄に470万円、5,700冊余に達している。この簡易閲覧所は辺地12ヵ所に設置されており、図書館を直接利用し難い遠距離の地域の方に利用してもらっている。今は年2回の巡回を行っているが、もう少し回数を増して利用に供したい。

●浜田市立図書館は2つの重点目標を掲げている。1つは幼児教育である。人間の性格は幼児までに形成されてしまうとまで言われている。

読書好きな子供の育成、大人になっても読書の習慣が自然に身につくためには、幼児の内にその習慣づけをする必要がある。図書購入については特に幼児の本に注意をはらっている。

今一つは郷土資料の充実である。郷土を大切に、郷土を愛する人間を育てるためには、まず郷土を知る事である。郷土資料室は図書館の顔だと思っている。当図書館では郷土資料室を昭和60年度と昭和61年度の2年間で再整理し、目録台帳を作り変えた。郷土資料の収集は時期を失すると入手が大変困難である。毎日の新聞や広告に特に気をくばり資料の収集に努力している。

●以上当図書館の概要を述べましたが、大人も子供も各々の生活が多様化してきており、活字ばなれのさげばれている昨今、図書館行政は段々と難しくなってきた。1つの事業を計画しても、なかなか人が集まらないと言う悩みもある。保育園、幼稚園に図書館見学を要請したり、機会あるごとに図書館をPRし、市民のニーズをさきどりして、少しでも多くの方々に利用していただけるよう今後も努力して行きたいと考えている。

県立図書館の電算化の歩みと導入計画

～県立図書館の電算化によせて～

島根県立図書館の電算化計画もいよいよ63年度情報検索システム稼働、64年度貸出システム稼働で、本格化することになりました。図書館職員の努力はさることながら、財政当局の理解と、県電子計算室の強力な援助があってこそここまでこれたと思いません。63年3月には機器の搬入、その後3ヵ月間のテストを行って、63年7月に待望の電算システムのスタートを切ることになります。

〈これまでの経過〉初めて当館が電算機と係りを持ったのが53年です。この年県電子計算室主催の電算研修を職員が受講しました。(以後毎年受講)

54年2月当館は「よりスピーディーで正確なサービス業務を行うため、昭和60年を目標にコンピューターを導入する」とし、具体的に日程を示しました。秋には初めて電算稼働施設(国立国会図書館など)の稼働状況を視察しました。55年は電算化を押し進めるため、館内にコンピューター・プロジェクトチームを結成し、研究体制を整えました。56年は調査研修のための予算が計上され、また国立国会図書館がジャパンマークの販布をスタートさせ、当館でもこのマークの研究を行うと同時に、これを使って業務を行っていた広島大学図書館などを視察しました。57年は当館電算システム計画の策定に入り、58年2月県行政事務近代化委員会において承認されました。計画の骨子は、当館システムの中心を情報検索機能と位置づけ、第1期計画は目録データの計画的な入力化、第2期計画は蓄積した入力データを使って、情報検索を中心としてのトータルシステム化としました。58年は書庫および開架室の増築にともない電算室の設置を行い、59年はジャパンマークの購入予算が計上されました。10月には「第2次島根県読書普及振興計画」が策定され、稼働年度を64年度とすることになりました。60年は目録データ入力テストを行い、この結果を基礎にして、当館用目録データの様式を決定し、県電子計算室において蔵書目録を作成していただいた。(以後1年分毎年作成) 61年はいよいよ機種選定作業に入り、選定委員会を設け、各メーカーからの提案を受け、選定の検討を行いました。なおこの年からヒット率とタイムラグを理由

に、ジャパンマークからTRC(図書館流通センター)マークに切り換えました。62年は6月に図書館システム導入の予算が認められ、機種が決定され、現在システム開発等の作業をすすめているところです。

〈導入システムとシステム開発の概略〉当館に導入するシステムは次のものです。

○ハード構成 本体—FACOM K-290R

周辺機器—磁気ディスク(1台)、磁気テープ装置(1台)、日本語ラインプリンター(1台)、端末器(7台)など

○ソフト構成 図書館管理システム(パッケージ) LIMS2

本体はオフコンですが、機能的には汎用機の下位クラスに負けないものです。図書館管理システムLIMS2は、情報検索、貸出業務、発注、受入、目録作成、蔵書管理、統計などトータルシステム機能を持っており、ほぼ満足すべきものですが、比較的市立図書館向けに作られているので、若干不足な面があり、その部分をシステム開発することにしました。

システム開発の内容は現在システムエンジニアとで設計の段階ですが、おおよそ次のとおりです。

- ① 発注・受入システム
- ② 典拠ファイルシステム
- ③ 目録・統計などの帳票類

〈今後の導入作業計画〉63年3月に機器が搬入されると、6月までテストを行います。目録データは62年度末で比較的新しい図書約7万冊が入力されることとなりますので、7月からスタートする検索稼働において、これらのデータを有効に利用して、利用者への検索サービスに対応することができます。

検索は書名、著者名、件名、分類、出版社名、出版年の各項目から検索できると同時に、2項目以上によるしぼり込み検索もでき、今までのカード目録とは質的に異なるサービスが可能となります。

63年度はその外、図書へのバーコード貼付作業、利用者登録作業を行って64年度貸出システム稼働への準備をすすめる予定です。

(県立図書館資料係)

「あゆみ会」が発足して12年一少しでも向上し、充実した日々でありたいとの願いをこめた読書会です。

年令層は40代から60代の主婦、みんなで育む会を目標に月1回県立図書館の本を中心に語りあいますが、みんなの協力と努力があったからこそ12年続けられたにちがいありません。でも人は易きに流れやすいもの、自分の好みでない本や難解な本に出会うと何やかと理屈をつけ怠慢になりがちです。話し合いの始めに「読後感を一言ずつ発表する」、欠席の時は「簡単な感想文を届けること」と自己にうちかつことに懸命です。おそらく私ひとりならこれだけバラエティーに富んだ本を選ばなかったにちがいないと今は感謝の心でいっぱいです。

心に刻みこまれた本それは、発足当時読んだ「和宮様御留」です。印象ぶよく数々の大作を残して故人となられた有吉佐和子さんを限りなく惜しいと思います。又宮尾登美子さんの作品は大好きで随分読みました。「芸妓娼妓紹介業」という父の職業に劣等感をもち悩み続けた作者が「權」の発表で何もかもさらけ出し、自分自身の痛みに耐えながらの情熱が人の心をうつすばらしい作品になったのです。同じように兄弟達の足跡を一足一足鎮魂の思いで書かれた三浦哲郎さんの自叙伝「白夜を旅する人々」も家族のことや自分の生いた

ちを隠すことなくホンネを書かれたその勇気に胸うたれながらも作家というものの業の深さに何ともやりきれない思いで考えさせられたことでした。

「天平の薨」「金閣寺」「良寛」はさすが格調高く、苦勞しながら読みましたが余韻嫺々、今も心に深く残っている本です。「破獄」「ひこばえの歌」「蕁麻の家」「水上勉さんの作品の数々」など好評でした。最近読んだ田辺聖子さんの「風をください」はウイットに富みさわやかでほっと息づき休まるような思い、たまにはこんな本も読み気分転換するのいいのではと話したことでした。

年に2回海潮温泉の湯にひたり、ご馳走をいただきながらの集いも楽しみのひとつ、孫や家族のこと、漬物のつけ方など雑談に花を咲かせ和やかに愉快に何でも語りあえる仲間があることをとてもしあわせに思います。発足以来書いた読後の感想文は今や厚手の大学ノート3冊に達しています。つたない文ですけど「あゆみ会の宝」、いや「ほこり」と自負しております。

読書会グループ紹介 私達のグループと読んだ本⑦

大東町あゆみ会

グループ名 「大東町読書会・あゆみ会」

会員数 9名

代表者 佐藤 春子

定例日 毎月第3日曜日・13時30分～16時

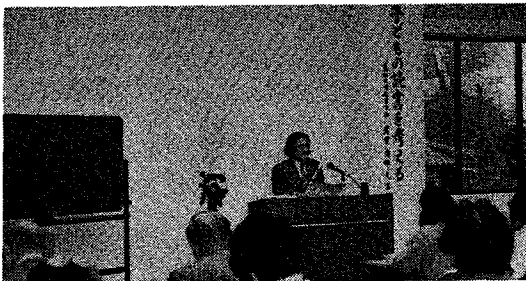
NEWS

★昭和62年度読書普及研修会・公共図書館等職員研修会の開催（10月29日・30日）

10月29日は県立図書館で、30日は西部読書普及センターで、鳥取大学教育学部から萬屋秀雄教授を招いて、子ども読書に関する研修会を開催した。

午前は、「子どもの読書を考える」と題して講演があり、午後は、子ども読書に取り組んでいく上での問題点などについて、先生から助言、指導をいただいた。参加者は、松江会場122名、浜田会場81名であった。

萬屋教授の講演の模様



★島根県読書推進運動功労者の表彰（12月9日）

島根県読書推進運動協議会では、今年度も読書推進運動のために尽くし、顕著な功績があった2団体、1個人を表彰した。受賞者は次のとおり。

○団体の部

1. 読書会「月灯」（代表者 今岡 勇 所在地 大東町大字大東191-1）
2. 石見町矢上母子読書会（代表者 新田すみえ 所在地 石見町大字矢上 矢上公民館）

○個人の部

小村照子（住所 出雲市塩冶町585）

★島根県立図書館協議会の開催（12月7日）

まがたま会館において開催した。62年度の事業概要及び、63年度の予算要求概要について、協議を行いました。承を得た。その他コンピューター導入の方向、BMのあり方等について質疑があった。